「一生成仏抄」講義

御書を拝読する場合には、かならず、佐渡以前の御書であるか、佐渡以後の御書であるかということを考えて読まなければなりません。なぜかならば、佐渡以前の御書は、御本尊がまだ御建立になっていないのです。佐渡以後になりますと、御本尊の御建立がありますから、御書にも本尊、本尊ということばがありますが、佐渡以前は題目を中心にして、御書のうえでお説きになっているのです。したがって妙法蓮華経というおことばについては、私どもが拝する場合には、かならず、御本尊を根幹として、拝していかなくてはいけないのです。

この一生成仏ということは、釈尊の仏法ではあくまでも調機調養されて、長い長い歴劫修行によって仏になるのです。すなわち機根が違い、仏法が違います。それに対して、日蓮大聖人の仏法は、南無妙法蓮華経の末法の法華経は、一生のうちに成仏ができるという仏法なのです。御本尊を受持し

て、そして、御本尊に題目をあげることによって、今世の人生も、また来世も、仏の境界で、仏のふるまいで生活ができるという偉大なる仏法なのです。一生成仏ということについては、深い深い仏法の偉大さを説かれているわけなのです。

> 夫れ無始の生死を留めて此の度決定して無上菩提を証せんと思はばすべからく衆生本有の妙理を観ずべし、衆生本有の妙理とは・妙法蓮華経是なり故に妙法蓮華経と唱へたてまつれば衆生本有の妙理を観ずるにてあるなり

これが信心の目的です。「無始の生死」――生命は永遠である。宇宙が存在していたときから、私どもの生命はある。始めがあって終わりがあるというような生命ではない。無始無終、どこまでいっても、われわれの生命は永遠なのです。宇宙も長遠なのです。

その永遠の生命のなかにあって、「生死を留めて」、すなわち不幸、苦悩、苦しみというものをとどめて、「此の度決定して無上菩提を証せんと思はば」、すなわちここで一念発起して成仏を遂げたいと思うならば、「すべからく衆生本有の妙理を観ずべし」――自分の生命のなかに仏界が存在する、自分自身が妙法蓮華経の当体であることを知らなくてはならない。それを覚知するということは、御本尊に題目をあげる以外に道はないのです。

「衆生本有の妙理」とは、われわれの生命に本来そなわっている妙理のことで、それはなにかといえば、「妙法蓮華経是なり」と。それは南無妙法蓮華経のことである。妙法蓮華経と唱えれば、「衆生本有の妙理」を観じたことになるのです。

その南無妙法蓮華経という偉大なる法を御図顕あそばされたのが日蓮大聖人であり、すなわち御本尊なのです。御本尊に南無妙法蓮華経と唱えることによって「衆生本有の妙理」を観ずることができるのです。すなわち、自分自身が妙法蓮華経の大宇宙のリズムに合致した、妙法蓮華経の当体であるということを観ずることができる、覚知することができるというのです。

文理真正の経王なれば文字即実相なり実相即妙法なり唯所詮一心法界の旨を説き顕すを妙法と名く故に此の経を諸仏の智慧とは云うなり

「文理真正の経王なれば」

「文理」とは、南無妙法蓮華経という文と、文によってあらわされている法理のことで、それが真実の法であり、一切経の王である。すなわち、御本尊は、仏さまの悟りをそのままあらわされた究極の経であり、八万法蔵の大将であり、いっさいの経々の王さまです。

八万法蔵を要約すれば、三大秘法に帰着するし、三大秘法をせんじつめれば、帰趣するところは一

大秘法の御本尊です。ゆえに経王です。

したがって、「文字即実相なり」――御本尊のお文字は、即実相である。仏さまの姿である。御命であり、観念的なものではない。「実相即妙法なり」、御本尊には妙の働きがある。不可思議なる働きがある。信ずれば功徳があり、誹謗すれば大罰を受けるというその力がある。

「唯所詮一心法界の旨を説き顕すを妙法と名く」

「一心法界の旨」ということは、衆生の一心（生命）に法界（現象世界）のすべてが収まり、またこの一心が全宇宙に拡がっていくとの原理です。これを天台は一念三千の法理として示しました。いっさいの経の究極は、一念三千の法門になるのです。それを説き明かしたのを妙法というのです。

ゆえに、「此の経を諸仏の智慧とは云うなり」と。

その南無妙法蓮華経、即一念三千の仏法によって、三千の諸仏は仏になることができた。したがって、成仏できる本源の知恵は、南無妙法蓮華経である、御本尊なのであるというのです。

一心法界の旨とは十界三千の依正色心・非情草木・虚空刹土いづれも除かず・ちりも残らず一念の心に収めて此の一念の心・法界に偏満するを指して万法とは云うなり、此の理を覚知するを一心法界とも云うなるべし

「一心法界の旨」について、ここでさらに説かれています。

「十界三千の依正色心・非情草木・虚空刹土いづれも除かず」

全宇宙のありとあらゆる生命存在と現象世界のすべてをさしているのです。

「十界三千の依正色心」――十界は、地獄から仏界までの十の境界をいい、瞬間瞬間にあらわれる生命の境地をあらわしたものです。

私自身一個の生命体とすれば、私のこの宿命、たとえていうならば、病気で苦しんでいる宿命であるならば、これは地獄界です。その地獄界でありながら、ご飯を食べた、いい手紙がきた、いい音楽が聞こえたと喜びを感じる、天上界です。地獄界即の天上界です。十界に具足の十界がまたあるのです。

宇宙全体からみた十界ならば、自分自身は人間界です。この人間界のなかに、喜びや悲しみや楽しみがありますから、やはり十界の働きがそなわっている。

十界におのおの十界があるので百界、そのそれぞれに十如是をそなえているので千如、さらに国土世間、五陰世間、衆生世間の三世間を具して三千世間となります。

「依正」とは、正報はわが身、依報は環境世界です。「色心」の色は肉体、心は精神です。「虚空」は大空、「刹土」は小さい土地。

「いずれも除かず・ちりも残らず一念の心に収めて」

いっさいの宇宙の全存在と現象が衆生の一心に、一念の心におさまる、含まれるということを、一

心法界というのです。

「一念の心・法界に偏満するを指して万法とは云うなり」

また、これは逆にいったわけです。一念というものは、したがって、全宇宙に通ずるということなのです。

「此の理を覚知するを一心法界とも云うなるべし」

具体的にいえば、御本尊を拝むことによって、題目を唱えきっていくことによって、如来秘密神通之力の力をおだしくださることができるのです。大宇宙のリズムは、きちんとわが生命の幸福に及ぼす作用になっているのです。

但し妙法蓮華経と唱へ持つと云うとも若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらず麤法なり、麤法は今経にあらず今経にあらざれば方便なり権門なり、方便権門の教ならば成仏の直道にあらず成仏の直道にあらざれば多生曠劫の修行を経て成仏すべきにあらざる故に一生成仏叶いがたし

「妙法蓮華経と唱へ持つと云うとも若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらず」

御本尊を持ち、題目を唱えているとしても、わが身が妙法の当体であると信じられないならば、成

仏はできない。他に幸せになる道はないか、幸せにしてくれる人はいないかと、環境や他人を頼っていくいき方が、「己心の外に法あり」と思うすがたです。

それでは「妙法にあらず」です。麤法（そほう）というのです。「麤法」とは、妙法に対して劣った法とか、粗雑な法をいいます。御本尊を持っていない邪宗教は、法を盗んで、南無妙法蓮華経を唱えているけれども、それは麤法である。

「麤法は今経にあらず」――麤法であれば、それは法華経ではない。「今経にあらざれば方便なり権門なり」――法華経でなければ、方便経であり権経です。「成仏の直道」になるわけはありません。いつまで修行しても、絶対に成仏することはできないと断定していらっしゃるのです。

三大秘法の御本尊を離れたならば、ぜんぶ麤法になり、権教になり、外道になり、「多生曠劫の修行」、すなわちどんなに長いあいだ修行しても、永久に仏になることはできない。いわんや、一生成仏はできるわけはないのです。

故に妙法と唱へ蓮華と読まん時は我が一念を指して妙法蓮華経と名（なづ）くるぞと深く信心を発（おこ）すべきなり

「妙法と唱へ蓮華と読まん時」、すなわち御本尊にお題目を唱えるときは、自分の一念、生命を南無

妙法蓮華経と名づけられたのであると信じていきなさい、と。題目を唱えた結果は、生活のうえに、はっきり事実の相として、現証としてあらわれるのです。信心即生活で、南無妙法蓮華経は、即いっさいの生活活動の源泉なのです。

自分自身が妙法蓮華経の当体になるのだ、その働きを湧現するのだという深い深い信心をもって、御本尊に題目をあげきりなさい、というお言葉です。

都て一代八万の聖教・三世十方の諸仏菩薩も我が心の外に有りとは・ゆめゆめ思ふべからず、然れば仏教を習ふといへども心性を観ぜざれば全く生死を離るる事なきなり、若し心外に道を求めて万行万善を修せんは譬えば貧窮の人日夜に隣の財を計へたれども半銭の得分もなきが如し

「一代八万の聖教」――釈尊一代で説かれた膨大な経教といえども、また三世十方の諸仏、菩薩といっても、ぜんぶわが心の外にあると思ってはならない。

地獄というも、極楽というも、仏というも、修羅というも、すべてわが一念にあるのだというのです。つまり、不幸になる原因も、幸福になる因も、自分のなかにあると、とらえることが大切です。どんなに仏法を学し、有名な宗教家や学者になったとしても、「心性を観ぜざれば」ということは、

御本尊に題目をあげて、わが仏界を湧現していかなければ、自分自身が妙法蓮華経の当体なりと信じて実践しなければ、「全く生死を離るる事なきなり」、苦しみを離れることは絶対にできない、とのおおせです。

大聖人が衆生のために御本尊を御建立くだされたということは、どれほどありがたいことか、御本尊にめぐりあい、題目を唱えられることが、どれほどの福運であるか、いまさらながら感謝にたえないではありませんか。

「若し心外に道を求めて万行万善を修せんは」

心外に道を求めてあらゆる仏道修行をしようとも、どんなに慈善事業をしようとも、御本尊を離れた修行であるがゆえに、なにも利益がないのであります。

「譬えば貧窮の人日夜に隣の財を計へたれども半銭の得分もなきが如し」

なんの得にもならない、くたびれ損だということのたとえです。

然(しか)れば天台の釈の中には若(も)し心を観ぜざれば重罪滅せずとて若し心を観ぜざれば無量の苦行となると判ぜり、故にかくの如きの人をば仏法を学して外道(げどう)となると恥(はずか)しめられたり、爰(ここ)を以て止観(しかん)には雖学仏教(すいがくぶっきょう)・還同外見(げんどうげけん)と釈せり

天台大師もこのようにいっているではないか、「若し心を観ぜざれば、重罪を滅することはできない。御本尊を信じて題目をあげなければ、絶対に罪は消えない。また、御本尊に信心しなければ、どんな仏道修行をしても、ただ無量の苦行となる罪業を積むだけだ。業因をつくるだけだ」――と。

皆さん方は信心できたからよかったのです。世の中には、立派そうな人もいるし、ひじょうに福運のありそうな人もいるし、幸せそうな人もいるかもしれませんが、一生涯という長いあいだの人生をみ、また永遠の生命からみた場合には、かわいそうな姿になっていくのです。

反対に御本尊を持った人は、これから幸福へ、それから生命力を横溢して、福徳を積み勃興していけるのです。

したがって、「かくの如きの人をば」――御本尊を知らない、日蓮正宗以外の宗教、人々です。いくら仏法を勉強しているような姿をみせても、ぜんぶそういうような輩は外道である。

それで摩訶止観には、「雖学仏教・還同外見」、すなわち「仏教を学すといえども、かえって外見と同ず」、外道と同じであると釈しておられるのです。

さらにいえば、御本尊を持っていても、信じて実践できない人は、やはり外道と同じになってしまうのです。

然る間・仏の名を唱へ経巻をよみ華をちらし香をひねるまでも皆我が一念に納めたる功徳善根

なりと信心を取るべきなり

ゆえに御本尊にお題目を唱え、方便品、寿量品を読誦し、またしきみやお線香をお供えするということも、ぜんぶわが一念に功徳、善根として納まるのであると信じていくのです。

講義を聞くのも、座談会に行くのも、指導しに行くのも、御供養することも、登山会に参加するのも、一切法はこれ仏法ですから、わが身が一念三千の当体になるわけですから、御本尊のためになすいっさいの行動が、感謝にあふれ、真心をこめたものであるならば、すべて自分自身の功徳、善根になるというのです。どんなにささやかな努力であっても、すべてわが身の福運となってかえってくるのです。

これがすこし、その一念がくるい、その一念が、信心から、この「一生成仏抄」の原理からはずれた場合には、とても苦しくなるのです。すぐにもんくやわがままをいいたくなるのです。その一念が、功徳をぜんぶ消してしまうのです。

之に依って浄名経の中には諸仏の解脱を衆生の心行に求めば衆生即菩提なり生死即涅槃なり
と明せり

「解脱」とは悟りです。あらゆる仏の得た悟りの境地、諸仏が悟ったその知恵が、じつはそのまま「衆生の心行」にあるということです。衆生とはわれわれ凡夫です。

そのことを、「衆生即菩提」――九界の衆生が凡夫の身そのままで成仏する、迷いの生活が悟りへと開ける、また「生死即涅槃」――苦しみの生命が幸福に輝く生命に転換する、と明かしているのです。われわれ凡夫が御本尊に題目をあげれば、すなわち、それが悟りであり、解脱なのです。

又衆生の心けがるれば土もけがれ心清ければ土も清しとて浄土と云ひ穢土と云うも土に二の隔なし只我等が心の善悪によると見えたり

われわれ凡夫の心が寂しければ、その土も同じように寂しく感ずるのです。われわれの心が楽しければ、その土も同じように楽しく感ずる。浄土というも、穢土というも、ぜんぶ、わが一念一心によって決定される、その反映であるというのです。すなわち、「土」には二つの違いはないのです。

「只我等が心の善悪によると見えたり」

自分の住んでいるところを楽しくするもしないも、それはわが一念によって決定されるのです。

自分の家庭というものを仏界にするか、地獄界にするか、天上界にするか、修羅界にするかはぜんぶ自分の一念一心によって決定される。広くいえば、全世界を地獄界にするか、修羅界にするか、仏

界にするか、天上界にするかは、そこに住む人々の一念によって決定されるのです。

ですから、御本尊を持つわれわれの一念で、どんなところをも楽しい国土にしていく、そういう環境をつくっていくのが、私どもの役目なのです。座談会へ行っても、わが家へ帰っても、会社へ行っても、わが一念で、喜びにあふれた楽しい世界にかえていけるのです。

衆生と云うも仏と云うも亦此くの如し迷う時は衆生と名け悟る時をば仏と名けたり

「衆生（凡夫）」といっても、「仏」といっても、なんのへだてもないのです。同じ当体なのです。同じ人間なのです。したがって、「迷う時は衆生」であり、「悟る時は仏」でもある。

同じ凡夫の当体でありながら、御本尊に題目をしみじみとあげて、わがこの生命こそ妙法と覚って、たくましい生命力と清らかな知恵をもって、人々を救ってあげたい、この法を教えてあげたい、という境涯の場合は「仏」です。

反対に信心を一生懸命やらないで、商売も苦しい、家庭も暗いといつも愚痴をこぼしている場合には「衆生」なのです。迷いなのです。

御本尊を拝んで、御本尊に照らされて、九界の現実の世界にあって悠々と闊歩していく、人生をたくましく切り拓いていく、それが私ども信心をしているものの姿なのです。安心立命です。

悩みや苦しみがあっても、それに引きずられない。悠々とそれを見おろしてのりきっていける。それで、人々を、慈悲をもって、御本尊へ、御本尊へと導ききっていく心が充満している。これがもう地涌の菩薩の生命なのです。

譬えば闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し、只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり是を磨かば必ず法性真如の明鏡と成るべし

「闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し」

くもった鏡も磨けば、玉のようによくうつる。

「一念無明の迷心は磨かざる鏡なり」

したがって、私どもの「一念無明の迷心」は、生命自体にそなわった根本の迷いであるがゆえに、不幸なのです。

これを磨くならば、かならず「法性真如の明鏡」とかわるのです。「法性」とは妙法蓮華経、「真如」とは真理のことで、結局、妙法蓮華経という意味です。「法性真如の明鏡と成る」とは、仏の生命、仏界の境地が湧現するということです。正しいものの見方ができ、豊かな知恵がわいてくるのです。

また染浄の二法でいえば、一念無明の迷心が「染」です。九界です。それから法性真如の明鏡が「浄」で、きよらかということです。仏界です。

一念無明の迷心は、魔の働きになってくるのです。法性真如の明鏡は仏の働きです。信心は魔と仏との闘争です。ですから題目をあげないで、御本尊を忘れては、その魔に負けてしまうというのは、ここにあるのです。

深く信心を発して日夜朝暮に又懈らず磨くべし何様にしてか磨くべき只南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを是をみがくとは云うなり

この御書の初めに「無上菩提を証せんと思はば」とありますが、無上菩提を証せんと思うならば、このようにして深く信心をしなさい、と結論されているのです。

無上菩提ということは、それ以上の悟りがないという意味なのです。無上に対して爾前経の悟りは有上なのです。まだ上があるという悟りなのです。世の中には名人とか、達人といわれる人がおりますが、それは有上なのです。

南無妙法蓮華経によって悟った悟りが、無上菩提なのです。最高の悟りになるのです。それを悟らんとするならば、「深く信心」をして、そして「日夜朝暮に又懈らず磨くべし」、今の皆さんの姿で

す。朝晩の勤行を怠らず、折伏行に邁進していることは、日蓮大聖人のおおせどおりに仏道修行している人です。

朝晩の勤行は、「日夜朝暮」とおしたためですから、朝だけでもいけないのです。晩だけでもいけないのです。地道な実践の積み重ねこそ、大切であります。

「只南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを是をみがくとは云うなり」

御本尊に、南無妙法蓮華経と題目を唱え、唱えきって、わが生命を磨いていくのであります。

抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心・不思議なる処を妙とは云うなり不思議とは心も及ばず語も及ばずと云う事なり、然れば・すなはち起るところの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとすれば色も質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず有無の二の心も及ばず有無に非ずして而も有無に偏して中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり

これはこのとおりです。「妙」とはどういう心か、ただわが一念の心が不思議な作用をする、これを妙というのである。したがって、妙法は不可思議、思議することのできないということです。言葉でもいいあらわすことができない、文字でもいいあらわすことができない、それを、「不思議」とい

い、「妙」というのであります。

「一念の心」は妙です。十界三千の働きは、縁にふれて刻々と変わっているのです。

ここは、恩師戸田先生が牢獄のなかで無量義経を読んでいたそのなかで、いきあたったところなのです。ちょうど、その三角でもない、四角でもない、まるくもない、青でも黄でも赤でもない、縦でもない、横でもない、長さでもない、距離でもない、という経文にぶつかったのです。なんのことだろう。それが仏性、心性、すなわち、生命そのものである。一念一心という表現だったそうです。それが、われわれの一念一心の作用なのです。

切ってみても出てきはしない。有るかといえば無いし、無いかといえば、きちんと精神作用、活動がある。妙であります。

有無ということばではとらえられないというのです。有でもない、無でもない。しかも有か無のどちらかをもってあらわれる中道一実の不思議な当体を妙というとのおおせです。

「此の妙なる心を名けて法とも云うなり」

此の妙なる心を名けて法とも云うなり、此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にかたどりて蓮華と名く、一心を妙と知りぬれば亦転じて余心をも妙法と知る処を妙経とは云うなり

妙法です。妙とは法性、法とは無明と説いてある御書もありますが、いろいろな心の働き、現象があるのですから、法になります。

御本尊は妙法の当体です。その妙法の当体に私どもが妙法蓮華経と唱える、南無妙法蓮華経と唱えると、しぜんに病気が治る、生命力が湧く、功徳がでてくる。これが現証です。不思議といわざるをえないが、事実は事実です。

したがって、「此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にかたどりて蓮華と名く」

これが譬喩蓮華です。妙法をあらわすものとして蓮華と名づけるのだというのです。

「一心を妙と知りぬれば亦転じて余心をも妙法と知る処を妙経とは云うなり」

心には善心、悪心、それから善心でも悪心でもない場合は、無記となぞらえておりますが、いっさいが妙法蓮華経なのだという意味なのです。

また、私どもの生活に約した場合は、御本尊に題目をあげる、妙法蓮華経と唱えているのですから、一心が妙です。生活のうえでも、さまざまな念心が起こります。だが、そのさまざまな瞬間瞬間の心、一念というものも、ぜんぶ妙法蓮華経なのだ、御本尊に通ずる念心であると信ずることが、南無妙法蓮華経の精神なのであります。

また、苦しい、楽しい、つらい、悲しい、その人、その人に応じて、おのおの刻々とその作用があります。それらはすべて妙法蓮華経なのです。苦しい、だからといって、南無妙法蓮華経を唱えるしかない。唱える当体が御本尊です。つらい、どうしたらいいか、南無妙法蓮華経を唱える。唱える当

体は何か、対境は何か。それは御本尊です。結局はそういうことになるし、それが大事なのです。

悲しい、といっても題目を唱える以外にない。さびしい、といっても題目を唱える以外にない、悩むといっても題目を唱える以外にありません。したがって、ぜんぶ仏になれる。結果はみな幸せになれる。これがこの妙境です。

然ればすなはち善悪に付いて起り起る処の念心の当体を指して是れ妙法の体と説き宣べたる経王なれば成仏の直道とは云うなり、此の旨を深く信じて妙法蓮華経と唱へば一生成仏更に疑あるべからず、故に経文には「我が滅度の後に於て・応に斯の経を受持すべし・是の人仏道に於て・決定して疑有る事無けん」とのべたり、努努不審をなすべからず穴賢穴賢、一生成仏の信心南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経。

日蓮花押

善心であり悪心であり、いずれにしても念々起こるところの心、その心自体が、こんどは南無妙法蓮華経と誓って、この題目を唱えればぜんぶ成仏できる。どんな悪心であろうが、男性であろうが、女性であろうが、愚かな人であろうが、高貴な人であろうが、ただ御本尊に題目をあげればいいのだ、仏になるのだ、というのです。

その一念の本体から悪心もでるし、それから善心もでるし、悩みもでるし、苦しみがでてくるのですから、なんでもその一心一念に、題目を、御本尊に向かって唱えさせればいいのです。ほんとうに簡単であり、ありがたい法門です。

「経文には」というのは神力品です。神力品には「我が滅度の後に於て」――釈尊滅度の後においてというのです。滅度には、三種類あります。滅度正法、滅度像法、滅度末法です。この「滅度」は末法と読んでいいのです。

「応に斯の経を受持すべし」――「斯の経」とは、末法の経、すなわち南無妙法蓮華経です。その三大秘法の南無妙法蓮華経を受持した「是の人」とは、名字即の凡夫です。

「仏道に於て」――仏道とは仏道修行です。その仏道修行において仏になることは「決定して疑有る事無けん」――疑う必要は絶対にないというのです。

さらに「努努不審をなすべからず」と念をおされていらっしゃいます。

「一生成仏の信心南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経」

釈尊の仏法は妙法蓮華経序品第一、妙法蓮華経譬喩品第三、妙法蓮華経如来寿量品第十六というように、説明なのです。

日蓮大聖人の仏法は、南無妙法蓮華経です。すなわち南無妙法蓮華経を唱え、それ自体の生命活動が生活のうえに功徳としてあらわれる。実際なのです、実践なのです。即生活に通ずるのです。

釈尊の仏法は妙法蓮華経、序品第一、方便品第二というふうに説明書きなのです。文底から拝すれ

ば、御本尊の説明なのです。また御本尊を中心にした功徳論と罰論、これが法華経二十八品といってもいいでしょう。

それに対して、日蓮大聖人の仏法は南無妙法蓮華経の仏法であり、すなわち歴劫修行せず、この世で、このままの凡夫の姿で、成仏の境界の生活ができる、との意味なのです。

（昭和三十六年四月二十三日）

「富木殿御返事」講義